

世界中探しても他にはいない
数学をネタにするお笑い芸人 大輪教授 が語る

なぜ、自分は数学のお笑いをするようになったか
大輪教授

1 教授を芸名にしたわけ

お笑い芸人、“インテリバカー代”大輪教授です。飯高先生より、ここに文章を寄せる機会を頂きました。ありがとうございます。

“教授”という芸名で“数学”を題材にお笑いのネタをして、4年半。しかしなぜ“教授”という芸名なのか、なぜ“数学”なのか。・・・事務所の社長に原因があるのですが。まずはその辺りからお話させていただきます。

元々、自分はコンビを組んでいた。テレビで見る様な、普通の若い兄ちゃん2人のコンビ（最も、自分等はほとんどテレビに出る様な事はなかったが）。そのコンビは、4年ほど活動していたのだが、段々と相方と意見が合わなくなってきてしまい・・・、遂には解散する事となった。今から4年半前、28歳。

28歳で、若手お笑い芸人が再スタートするとなると、これはなかなか大変な作業。再スタートでも、1年2年やって認められる世界ではない。周りではもっと若い人達が力を付けてきている。希望の光が見えてくるのは早くても何年後になるのか、考えただけでもゾッとする。新たなコンビを組もうにも、相方を探すのも一苦勞（元々の相方は、意見こそ食い違っていたものの才能は認めていたので、新しい相方を見つけてもそれ以上を要求するのは難しいという事もあり）、1人で始めるにも相当なエネルギーが必要になる。解散して弱気になっていた自分には、そんなエネルギーを振り絞る力も自信もなかった。そして、幸運にも自分を放送作家として雇ってくれるという方も現れた。コンビを解散して、1人が放送作家になるという前例はいくつもある。そういった状況だったので、芸人は辞めようと思っていた。しかし、やめるからと言って、今日から「はい、やめました」という訳にも行かない。もちろん、お世話になった方々に報告、挨拶をしなくてはならない。まずは、事務所の社長に挨拶を。いくつか偶然が重なり、コンビではなく1人で挨拶に行く事に。

「・・・これこれこういう訳で、コンビを解散する事になりました。」

「そうか、で、お前これからどうすんだ？」

「放送作家でやっていこうかと思っているのですが・・・。」

「なんだ、やめんのか？」

「はい。」

「やめなくてもいいじゃないか。1人でやれ、1人で。」

「は、はあ・・・。」

「“教授”だな。」

「は？」

「“教授”、大学教授の“教授”。」

「え？」

「“教授”って芸名でやったらいいじゃないか。理屈っぽいところあるだろ。なんか、そういうキャラつけてやったら面白いんじゃないか？」

自分にとっては、社長の言っている事の意味が全くわからない。「やめる」報告をしに行ったのに、“教授”という芸名が付いてしまった。そばにいたチーフマネージャーも、「これはやるしかないっすねえ。」

などと、なんだか話にノリノリである。その場にいた、自分以外が、自分が“教授”という芸名でやっていくイメージをどんどん膨らませている。話もどんどん盛り上がっていく。結局、流された様な形になって“教授”でやっていくという事で話がまとまってしまった。

これを読んでいる方で、万が一、大輪教授に信念などを感じていた方・・・、勘違いです。本当に申し訳なく思います。こんな感じで、社長の思いつきで誕生してしまったのです。

2. “数学”をネタにするわけ

さて、社長に続ける様に言われた事は、認められているという事なのだから、そこはプラスに捉える事は出来る。なので、芸人を辞めないという選択肢も選ぶ事は出来る。理屈っぽい所も認める。しかし、しかしである。全くもって自分に“教授”の素養がないじゃないか。なんせ、最終学歴専門学校卒なのだ。しかも、演劇の専門学校。大学など受験した事もない。高校も埼玉県の普通の県立高校。今までの人生、“教授”と全く関係がない。これは困った。流された自分にほとんど嫌気が差す。しかし、話はまとまってしまったのでまずはネタを作らなければならない。

“教授”はいいが、教科をどうするか、だ。高校生の時に、特に突出して得意だった教科もある訳ではない。見事なまでに平均的であった。

よし、ここはひとつ、全部の教科をやってやろう。そのうちハマるのが見付かるかも知れない。

国語（漢字）、数学、理科（元素記号）、社会（歴史）、英語、全ての教科のネタをやってみた。その中で最も良かったのは・・・、実は数学ではない。社会科の歴史の年号の語呂合わせのネタであった（今考えてみると、現在の自分のネタにある π や $\sqrt{\quad}$ の語呂合わ

せにそれが活かされている)。数学をメインのネタにしたのは、もうしばらく経ってからなのだ。

ある時、どうしても新ネタが思い浮かばなかった。ライブはすぐそこに迫ってきている。ネタというのは大抵5分間くらいはやらなくてはならない。本当にギリギリになった自分は、5分間何とか時間だけ持たせて誤魔化す方法ばかり考えていた。説明する必要が長いものがあれば、結構時間が使えるぞ、と。そこで思い出したのが、何かの本で読んだ「黄金比」の話である。これは説明が長いネタに出来るかも知れない。

世の中には最も美しいとされている比率があつて、黄金比という名前で、名刺やミロのビーナス、自然界にも云々・・・、その黄金比を導き出すにはこういう式を立てて、これを計算すると1:1.618くらいになって・・・。といった説明でかなり時間を使って、その後、色々変な物を黄金比にしたらもっと美しくなるんじゃないか、などというネタを苦し紛れに作った。

そしてライブ本番。自分としては「苦し紛れに誤魔化した」というネガティブ発想のネタなので、それほどウケるとは思えない。・・・ところがそんな事はなく、しっかりウケたのである。しかも、ウケた部分はオチの方ではない。なんと、説明部分で一生懸命板書をしながら計算している後姿がウケたのである。これは、自分でもビックリであった。

「ウケる」＝「似合う」という事なのだと思う。笑いの取り方は様々な手法があると思うが、「似合う」というのもそのひとつだ。ハマり役、というヤツである。自分は、板書で一生懸命に計算を説明しているのが似合うのだ。ここにひとつ、光明が見えた。計算をするのが似合うなら、数学というものにこだわってみようじゃないか。苦し紛れに作った「黄金比」のネタで、数学をメインにする様になった。

こういった経緯で、“教授”という芸名で“数学”を題材にお笑いのネタをする様になったのです。今回、この文章を書いた事で改めて振り返り・・・、状況に任せている自分に気が付き、恥ずかしい限りです。

3 数学への思い

次に、自分の数学のお笑いに対する気持ちを述べたいと思います。

数学という題材。考えてみれば数学というヤツは、他のどの教科よりもパツと見、頑固で仏頂面で色気がない。これは裏を返せば、お笑いに向いているかも知れない。無邪気な子供が転ぶのは笑えないが、気難しい政治家が転ぶのは笑える。数学は、一般的に見ればその気難しい政治家側の存在に近い。

また、とっつきにくいイメージも魅力的だ。お笑いの世界では「はいどうも～」なんて愛想振りまいて出てくる芸人はゴマンといる。そんな中で、「数学の時間です」なんて無

愛想な芸人が1人くらいいても面白い。

本やインターネットで、数学関連のものを色々調べる様になった。そこで、数学の面白さに少しずつ気が付いてきた。頑固でも仏頂面でもなさそうな気もしてきた。パスカルの三角形や、フィボナッチ数列などもここで初めて知った。逆に、なぜこんな面白くて不思議なものを小中学生の時に教えてもらえなかったのだろうか。最も、その時に教えてもらっていたらその面白さ、価値を感じたかどうかはわからないが。もちろん、自分の薄い知識では、まだまだ出会えていない面白いものもたくさんありそうな気がしている。

自分は最終学歴専門学校で、数学も人並みに忘れている。本を読んでいく中で、中学レベルの話なら難なく読めるのだが、高校以上になるとちょっとつらい。しかし、これが現在の自分にとって重要な所であるのかも知れない。もしも自分が高校以上の数学を説明できるレベルまで理解出来たら、一般性がなくなってしまうのではないか。自分が普通知っているだろうと思っている事を表現して、一般の方がそれを知らなかったら、ネタとして成立しない。まあ、勉強して知識を増やした上で、一般性のバランスをとるのが1番いいのだが・・・、すみません、その点は精進したいと思います。

ここ数年、自分が数学に触れてきて、「あ、数学ってそういう事なのかな？」と感じた事がある。数学というモノ自体が何をしようとしているのか、という。自分の様な者が、そんな事を語るのはまだまだ早いのかも知れないが。

一口に数学と言っても色々な分野がある。代数、幾何、確率・・・e t c。それぞれ違う分野なのだが、共通した目的がある気がする。

それは・・・、「シンプルになろう」という事。

数学っていうのは「世の中、色んな事あるけどさ、それ、シンプルにしていこうぜ!!!」と言っている気がする。自分の代表ネタのひとつである素因数分解なんて特にそうだし、沢山ある公式の数々もそれを表している。確率でも、例えば「549人中183人が賛成」より、「 $1/3$ が賛成」と言った方がシンプルだ。

ただ、シンプルにしようとしすぎた為、「x」だ「sin」だ「√」だと、耳慣れなくて可愛くない記号などを沢山、使わざるを得なくなってしまった。簡潔にしすぎて、ドライになってしまっている。想像力が豊かで自主的に数学をやっている人は、ドライな印象の中に自分でその魅力を見つける事が出来るかもしれないが、普通に授業で習うだけの数学をやっている人にそれを要求する事は難しい。

数学的な考え方が、仕事でも遊びでも役に立つ時が多いし、いつの間にか使っている事もよくある。ただ、学校で教えている数学の表情と、日常生活で役に立つ数学的な考え方の表情に、非常に距離がある。ダイエットしすぎて、愛らしさがない様子。そこをなんとか色々、肉をつけたり表情をつけたりして、多少とっつきやすいモノにするのが、自分のやるべき事かも知れないと、最近感じている。

上に書いた内容の他にも、飯高先生から、「数学の教育はどうしたらいいか？」というお題も頂いております。無学な自分ですが、生意気ながらその辺りも触れてみたいと思います。本当に自分の勝手な意見です。ちょっと上から物申す形になります事をお許し下さい。

4 数学の教育をこうしよう

ひとつは、数学を楽しみ、難しくないものにする為に、子供に媚びる必要は全くないと思う。例えば、円周率が「3. 14」ではなく、「およそ3」にしたからといって、子供が算数・数学に親しみを持つかと言えば、全くそう思わない。むしろ逆に、「円周率というのは、3. 14からずっとずっと永遠に続いて終わりが無いんだよ。」と言った方が、俄然興味が沸く。「ずっとずっと続くのなら、終わりはどうなっているのだろうか?」「数字が何百個も何千個も、いやもっともっと並ぶんだ」「不思議!!」と感じ取ってもらった方が、よっぽどいい。「先生は、この円周率を100桁まで言えるんだよ。」という先生の方が、ただ教えている先生より、楽しそうである。

ちなみに、自分の特技に「円周率100桁暗誦」というものがあり、円周率の覚え方のネタもある。これは、「およそ3」に対する上記の様なアンチテーゼ、怒りで作った特技、ネタなのである。

そして、芸人・・・舞台に立つ人間からの意見を言わせてもらおうと、授業が充実するかどうかはやはり、先生の「感情」が大事になってくるだろう。舞台ではもちろん台詞を言う。授業で喋る事も、舞台上で発する台詞と同じとするならば、「感情」の入れ方が、聞いている人間に伝わるかどうかのポイントになってくる筈だ。

「感情」を入れるというのは、やはり人前で喋っている先生でも、俳優や芸人ではないので難しく感じるかもしれない。当然、テクニックや台本構成なども大事なのだが、そういった事よりもずっとずっと大事な事がある。

「本当にそう思っているかどうか」、だ。

テクニク的にちょっと劣っている俳優でも、台本構成が甘い漫才でも、本当にその人が思っている事を台詞として喋ってくれた時は、大変魅力的で面白いものになる。

例えば、貧乏を笑いにしようとしてこんな事を言ったとする。

「毎日、パン屋さんでパンの耳もらって食い繋いでいるんですよ。」

こいうった台詞でも、実際にそうしている人と、演技で笑いを取る為に言っただけの人では、ウケが明らかに違う。演技力がいくらあっても、その人の私生活など説明しなくても、お客様は、簡単に感じ取ってしまう。また、実際にパン屋さんで耳もらって食い繋いでいたら、「そしたら、ある日店長にこんな事言われたんですよ・・・」「パンの耳もらっているのは、僕だけじゃなくて、実はライバルがいて・・・」「ボトルキープみたいにもう、マジックで袋に名前書きちゃって・・・」想像以上の台詞がどんどん出てくる。テク

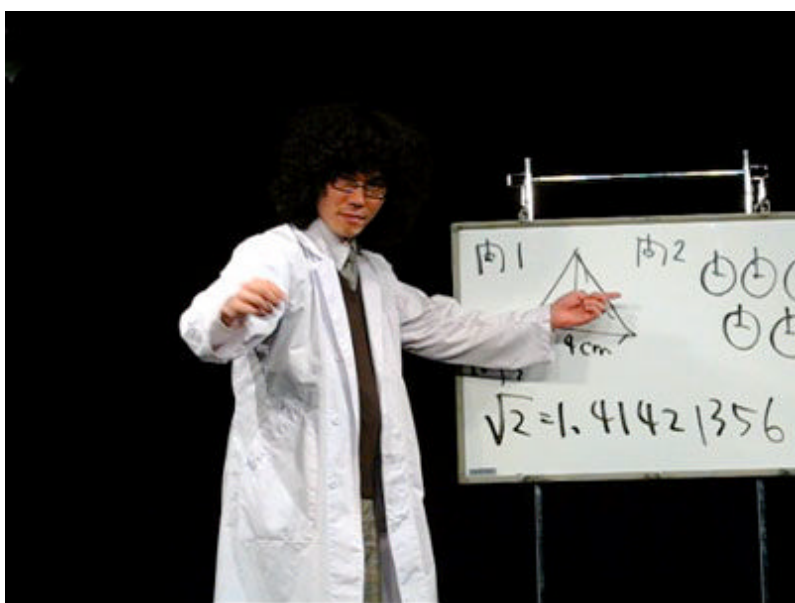
ニックや構成など関係がない。リアルだけが浮き彫りにされていき、聞いている側の心に伝わるのだ。

つまり何が言いたいのかと言うと、先生が、本当に心の底から数学を愛していて、数学の魅力を感じていて、その面白さを生徒に伝えたいという「感情」が、1番大切になってくるのだという事。別段、わざとらしく情熱的に喋る必要はない。声を大きくして叫ぶ事もない。ただ、心の底からそう思っている事の方が、聞いている側に伝わりやすい。ただ、それだけである。

「数学の教育はどうしたらいいか？」というお題の答えは「『数学の魅力を伝えたい』という事を、心の底から思う事」という事でいかがでしょうか？抽象的でかつ、精神論で申し訳ありません。当然、心の底から思っていらっしゃる方がほとんどだと思います。しかし、「なぜこれが面白いと自分は思ったのか」「この面白さを沢山の人と共感したい」という観点でもう一度考えて頂けたら、微妙に変化が訪れる気がしております。本当に、生意気を言いました。すみませんでした。

お笑い芸人“大輪教授”と致しましては、その辺りの高校生にも及ばない数学知識をもっともっと勉強して広げつつ、先生方とはまた違った入口から、数学の魅力を沢山の人の人へ伝えて行ければいいなと思っております。

貴重なスペース、ありがとうございました。



大輪教授はホワイトボードにマーカーが定番

大輪教授は素因数分解が得意。
サザエサンの素因数とは何だろう？



- 1、サザエさんを素因数分解してみよう。どんな素数、要素が入っているかな？
- 2、サザエさんは、パーマだ。じゃあ、パーマという素数を抜き出してみよう。
- 3、パーマじゃないサザエさん・・・、その辺に居るただのおっちょこちよいになる。
- 4、おっちょこちよいの素数は・・・、
おっちょこちよいはよく失敗する。失敗という素数が入っている。
- 5、おっちょこちよいが失敗しないとすると、これはキセキだ。

つまり、サザエさん=パーマ×失敗×キセキ。

サザエさんとは、奇跡的にパーマを失敗しているという事が、素因数分解によってわかる！！

大輪教授との出会い

飯高 茂

1. 発端。

学習院大学での私のゼミの学生であった神田愛花さんは2002年度に卒業して、すぐにNHKに入社し、花の女性アナウンサーになった。福岡放送局で4年勤務してから2007年4月に東京本社配属。九州にいる頃から、紅白の応援隊として、「アイカの。。。｣というキャッチフレーズで全国を回って紅白の人気を一層アップするため獅子奮迅の働きをしてそれが夕刊紙に大きく取り上げられたり、彼女の活躍ぶりは驚くほど目立つものであった。

さて、07年の5月頃、突然

「先生は私のことをお忘れとは思いますが、2002年度に卒業した神田です。」

という丁出だしの寧なmailをいただいた。そして、今、「オンエアバトル」という、若手のお笑い芸人を集めた番組をしているので、先生も見に来てくれませんか？ と誘われたのである。「番組収録の見学とは面白そうだ、是非行ってみたい」と返事をした。

そして、夏も近いある土曜日の午後、渋谷のスタジオに出かけていった。

2. オンバトを見る

番組は10組のお笑い芸人が順に芸を披露し、それを100人の素人審査員が、審査して上位の5組がオンエアーされるというものである。若手が生き残りをかけて、必死にお笑いの芸をする。じっくり見るとなかなか面白いものである。

コンビを組んだ芸が多いが、一人で芸をする場合もある。白衣の男が出てきて、ホワイトボードにマーカーで算数や数学に関するネタをテンポ良く披露するのがありこれには感心した。芸名が「大輪教授」というのも笑えた。そこでうんと褒めて書いてから、心の中ではもちろん合格の点をつけたのだが、そのとき大輪教授は不合格であった。だからこの回は放映はされていないが、舞台上で神田アナと次のような会話をしていたのを知ることができた。

「前には、素因数分解なんかでしたね」

という神田さんの問いかけに

「神田さんは、数学科の出身ときいたので、数学ではばれると思って算数のネタにしました」

などと答えていた。

3. 大輪教授を数学教育の会に招待する

大学で学生に聞いてみると、1割くらいは大輪教授のことを知っていた。素因数分解が

得意のネタということも知られていた。YouTubeで見ると、大輪教授の平方根の覚え方というのがあり、これもなかなか面白い。たとえば 6 の平方根を、妊娠子宮予約無し と覚えるというのである。

お笑いで広める数学というのも親しみがあっていいかもしれない。これは新鮮な発見である。そこで、彼に9月の「数学教育の会」に来てもらい、芸を披露してもらったらどうだろう、と考えるにいたった。いざとなったら、神田アナウンサーのゼミの先生という奥の手が使えるのだが、それはとりあえず封印して、自分で直接彼にあたってみることにした。インターネットで「大輪教授」を捜し、所属の事務所を調べ、はがきを出しておいた。その文面は、今となっては余りよく覚えていないが、

「神田アナウンサーのことはよく知っています。数学教育の会に来て、芸を披露してもらいたい。そのを相談したいので、851051@gakushuin.ac.jpに連絡をしてほしい」

という趣旨だった。数日たっても返事がないので、やはり、神田アナウンサーに口利きを頼むかな、と思い始めた頃、mailで返事がきた。そこで、

「数学の教授が大部分の数学教育の会で、数学の芸をしてほしい。20分くらいでよい。みんなからお金を任意に出してもらおう。もし、2万円以下なら、私が責任をもって2万円は払う、それを超えたら全部差し上げる」

という提案をした。紆余曲折はあったが、事務所も「そういう話ならしてもいいよ」ということになったそうだ。

さて、話がまとまってから、その間の経緯に関する裏話を彼が教えてくれた。私の出したはがきは事務所に届いてはいたが、

「字も汚くて読めないし、こんなの捨てておくよ」

と事務所のマネージャがいうので、ファンの手紙かもしれないから大事にしなきゃと思って、捨てられたはがきを拾って、何とか解読して、私宛にmailをだしたそうだ。(ひどいはなし)

4. 数学教育の会

9月の数学教育の会では、大輪教授の芸は実にうまくいった。大輪教授が出てきただけで数学の本物の教授たちは笑い出したのであった。

うっかりすると2万円持ち出しになるので、必死にお金を出してあげよう、と声を枯らした頼んだせいもあり、36000円も寄付が集まった。文部科学省のお役人も1000円ずつ出してくれた。

5. リスーピアでの出来事

お台場にある理数教育の民間施設「リスーピア」で、2008年3月15, 16日に大輪教授の数学漫談が行われることが、岡部恒治さん（埼玉大学）の世話で決まり、私はそこに前座として彼を紹介することになった。そして結局、1回15分の公演を1日に5回、計10回行った。観客は、小学生が10から20名でその親御さんたちも加わり50名前後というところであった。前半分では円周率に関する話題をおもに漫談を掛け合い的にしたのだが、ここでその内容は記さない。何回目かの公演後控え室で話しているとき、「学習院大学の本当の教授、イイタカ教授」とコールすると、急に席について聞こうとする人がいる。だから、きちんと学習院大学教授が来ていると紹介をした方がいいのではないだろうか、という意見が出た。しかし「大輪教授の他に、お笑い芸としての教授が来たかもしれないと、客を思わせる方が面白いだろう」と私が言ったところ、「まあ、それでいいだろう」ということになった。最終日になってから、会場の一角で「算数トライアスロン」の世話をしていた日本数研協会の事務所の方がこういうのである。

「ここでイイタカ先生に会えるとは思っていませんでした。漫談を見た人たちは、まさか本物の先生が来るわけではない、などと言っていました。だから、実は本物だと、教えてやったのです」



イイタカ教授と大輪教授